

高所でのアルパイン・スタイル

草嶋雄二

現在、世界の最先端での登山は、より高くより困難な山を、ルートをし、できるだけ少人数でポーターを使わずに短期間で、しかも無酸素で登るという方向に進んでいる。そのためにはいろいろなスタイルにより頂上まで至るわけだがその中で最も先鋭的かつシンプルなスタイルがアルパイン・スタイルであると思われる。ではこのアルパイン・スタイルとはいったいどういう方法なのか、それは文字通りアルプスで登るやりかた、山麓から頂上まで一気に1日で、あるいは数回のビバークを重ねながら登るスタイルである。これを高所で行う場合は、小チーム(2~3名程度のメンバー)によりサポートなしで前進キャンプをあてにしない、ワン・プッシュ登攀であり通常我々が日本国内で岩壁や氷壁などを相手にして登る時と同じことである。このアルパイン・スタイルという言葉は数年前から流行しはじめた言葉であり、事実このスタイルを採用する遠征登山のチームが増えつつある。包囲法(大遠征隊)に対する突撃法(小チームによるアルパイン・スタイル)ということで短期間あるいは速攻による登山ということになるだろう。ラインホルト・メスナーとベーター・ハーベラーによるガッシャーブルムI峰(8068m)の登頂のころからいわれだした言葉のようだ。しかしエベレスト初登頂以前には、このアルパイン・スタイル、あるいはそれに似た方法で多くの高峰が登頂されている。1953年5月29日に完璧な包囲法と十分な酸素補給によってエベレストが初登頂されてから、その後の多くの遠征隊が大遠征隊を組み、包囲法に基づいた登頂を高峰で繰り返してきたのである。したがって、アルパイン・スタイルは決して新しい高所登山の方法ではない。

包囲法が高所登山の常識であった時期には、アルパイン・スタイル(あるいは突撃法)は無謀な、ヒロイックではあるが悲惨な結果に終わるものと考えられがちであった。しかし実際には上手に実行されれば安全かつ快適な登山となることがわかってきたのである。もちろん登攀そのものが高所で行われても、酸素の使用は問題外であるためにチームのメンバー各自が完全に高所に順応していなければならない。当然ロング・ルートとなるので数回あるいはそれ以上のビバークを考えた食糧、装備、燃料などの緻密な準備が必要になってくる。また、登山中、チームの目の前に現れる課題は、メンバー全員で克服してゆかなければならない、チームのメンバー1名でも力の弱い者がいるということは論外であり、各メンバーの力、目的意識、タクティクス的一致が必要となる。また悪天候に対しての備えが必要であり、撤退に際しては断固とした決断力と勇気が必要である。アルパイン・スタイルを実行する際には、以上のような課題をこなしてゆかねばならないが、むしろ逆にいえば上手にこなしてゆけば快適な登山となる可能性がある。もちろん、これらをこなしてゆくには実際に高所登山を豊富に経験した登山家でなければ実行しにくいものではあるのだが。

アルパイン・スタイルを高所での垂直の登攀として実行し、完全に成功させた小チームは1975年ガルワール・ヒマラヤのドゥナギリ南東壁(7066m)を登頂したイギリス隊で、ディック・レンジョーとジョー・タスカーの2名であった。またジョー・タスカーは翌年に同じ山域のチャンガバン西壁(6864m)をピーター・ボードマンと、やはり2名の小チームで登頂している。なぜ2名で?ということになるが、彼らはチームが小さければ小さいほど結束力のあるチームになると考えたのである。少人数になればお互いの信頼、理解度が深められ、それがチームの安全と成功のチャンスを増す強力な「結束力」をもたらす。「メンバー自身は責務を自覚すればするほどうまくやりとげられるものである」とジョー・タスカーは後に述べている。またそのために彼ら自身にとってヒマラヤでの小チームが冬季のヨーロッパ・アルプス山中での小チームより危険度が高いとは思えないと考えたのである。それに人数が増えれば費用、人間関係についての問題が起きることは明らかである。大遠征隊ともなれば当然巨大スポンサーが出現するわけであるが、スポンサーの遠征隊に対する大きな影響力、登頂者と大遠征隊の歯車としてそれを支えたメンバーとの間の心のわだかまりといったものである。そのうえヒマラヤ山域の各国は多額の外貨を落としてゆく大遠征隊を歓迎する方向にある。彼らはその土地にあふれるほどの多くの人間が殺到したことと起こるゴミ公害、経済的、文化的な破壊などヒマラヤ山中で進行しつつある取り返しのつかない損傷には気がつかないでいる。もしも遠征隊が小さければ、できるだけ可能なかぎり控えめにその地域に入ることができ、その地の文化、生活に最小限の損害を与えるだけで押さえられる。2つの異なる社会の文化的交流はお互いに大変有益なことではあるが、その土地にあふれるほどの人間が入り込むと、土着の文化を破壊する危険性がある。小チームならば、多額の資金を集める必要もないし、外部の、特にスポンサーに対しての義務や契約に縛られることもなく、登山がメンバー自身のものになる可能性が大きい。大遠征隊が組織の登山であり、複雑な運営のもとに退屈な内容の登山をし、退屈な結果に終わるのに対し、アルパイン・スタイルは運営そのものは非常にシンプルで、内容結果共に変化に富んだ刺激的なものになる可能性を持っている。遠征隊が小チームによるアルパイン・スタイルで行われることにこしたことはない。しかし目的の山によってはこのスタイルでは無理な場合も当然考えられる。そうした場合でもできるだけアルパイン・スタイルに近づいたスタイルに変えてゆくような柔軟な頭脳を持った登山家にならなければならない。日本国内で登攀の水準を少しでも上げようと努力していた人々がヒマラヤへ出掛けると急に少しだけの進歩で満足してしまふ。我々は自らを欺くように、目的を思いもかけない方向に変えてはいけ
ない。